タウンニュース®

葛野小
地域防災拠点

障がい者が訓練でブース

H29.11.9

特性への理解呼びかけ

災害時、障がいがある人の避難誘導や避難所での生活についてどのように対応するのか。区内にある支援施設の職員や地域住民が中心となり、障がいがある人への理解を進めようという取り組みが進んでいる。11月19日(日)には葛野小学校で障がい者が自ら主体となって参加する防災訓練が初めて実施される。

活動を進めるのは葛野小地域防災拠点運営委員会（小山義男委員長）と対象地区に所在がある地域作業所なかだ、いずみ福祉作業所ゆう、特定非営利活動法人ジョイカンパニーの3カ所の障がい者支援作業所。

毎年一回開催されている葛野小での防災訓練には、これまで同作業所の職員や障がいがある利用者は避難者として参加するだけだった。しかし今年は「災害時に障がい者に対してどのように対応すればいいのか」という理解を促すため、防災訓練時に専用ブースを設け、障がい者が自ら理解を呼びかける。

（左から）小山委員長、佐藤さん、西谷理事長

ジョイカンパニーに通所する佐藤まゆみさんは、「地震が起きるとパニックになってしまい自分では対応できないので、大丈夫ですかなどと優しく声をかけてほしい」と話す。訓練当日はブースで、支援が必要な人が求める声掛けの仕方などについて話をするという。

市では「黄色と緑のバンダナ」という活動が2005年から開始。この活動は、災害時に支援を必要とする障がい者が黄色のバンダナ、支援をすることができる人が緑のバンダナを身に付け、一目で救援体制が取れるという仕組み。これらの取り組みも訓練で紹介する。

ジョイカンパニーの西谷みどり理事長は「これを機会に障がいがある人への理解が進んでほしい」と話す。

小山委員長は「障がい者も社会の一員として助け合うことが必要」と語った。

H29.11.30

障がい者がブースで説明

訓練に主体参加

障がいを持つ人が自ら主体となって参加する防災訓練が11月19日、葛野小学校で初めて開催された。地域住民など255人が参加し、障がい者の発表を熱心に聞く姿が見られた。

黄色のバンダナを着用する参加者ら

訓練は葛野小地域防災拠点運営委員会（小山義男委員長）や消防団、区内にある障がい者支援作業所として、地域作業所なかだ、いずみ福祉作業所ゆう、特定非営利活動法人ジョイカンパニー、泉地域活動ホームかがやき、トムトムの家、つぼみの家の職員が参加。

「拠点内作業施設班」という一つのチームになって災害時に障がいがある人がパニックにならないよう支援する方法や、災害時に支援を必要とする障がい者が黄色のバンダナ、支援をすることができる人が緑のバンダナを身に付ける制度を訪れた人に説明した。

訓練に参加した粟野清嗣さんは「知らなかったことも多く、とても勉強になった。地域一体となって障がい者を理解する大切さを感じた」と話した。